



渡辺一夫著作集 13





渡辺一夫著作集13 補遺 上巻

一九七七年九月十日 初版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一―七六五一

郵便番号 一〇―一九一

振替 東京六一四―二三

印刷 株式会社精興社

製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七七

(分類)1398(製品)74813(出版社)4604

補遺 上巻 目次

A 戦国明暗二人妃（一九六九年―一九七二年）

端書……………5

a 巷説・逆臣と公妃

詳細目次……………13

本文……………19

b 世間噺・マルゴ公妃

詳細目次……………179

本文……………183

B 世間噺・戦国の公妃（一九七一年―一九七三年）

緒言……………359

参考書目表について……………360

詳細目次……………361

本文……………367

後記	537
----	-----

参考書目表	542
-------	-----

C ルネサンス雑考補遺（一九七一年—一九七四年）

世間噺・昨日敵今日友 今日友明日敵	545
-------------------	-----

白日夢 カトリクス・ド・メデイチ太后の最期とその脚の行方	577
------------------------------	-----

失われし島を求めて	595
-----------	-----

蜘蛛網の羽虫の話——ガスパール・ド・コリエーの場合——	603
-----------------------------	-----

或る決闘の話——Coup de Jarnac についで——	624
-------------------------------	-----

編者後記（二宮敬）	643
-----------	-----

別刷 一五五——一五五九年頃のパリの一劃（西南部）

一七三九年頃のパリ（マレー地区の一部）

『世間噺・戦国の公妃』主要都市略地図

諸家門略系譜

補遺 上卷

編集 二宮 敬

大江健三郎

A

戦国明暗二人妃（一九六九年―一九七一年）

端書

フランスのルネサンス（十六世紀）頃の文学作品や史書を齧っているうちに、我々日本人には一見縁遠く、また聞き馴れないような人物や事件ではあるけれども、当時の世間では評判になっていたものが数々あることを知った。そして、少し調べてみると、そういう人物や事件が、なぜ評判になったかも、少しずつ判りかけてきたし、当時の時代相が前よりも緻密に想像できるようになった気がした。これらの人物や事件を、虱潰しに調べてゆけば、今までフランス・ルネサンス文学及び文化について私が抱いていた考え方の粗雑だった面も、少しは補正できるに違いないと思った。これは楽しみなことである。しかし、私の残された歳月にも、私が参考できる資料にも、また私自身の能力にも限りがあるから、気附いた人物や事件を全部調べ切ることは、私に許されていないし、若干調べあげたものにしても、斯道の専門家の学者から見れば、歪んでいた穴ぼこだらけであるに違いない。本書に収録された二つの雑録も例外ではない。

本書には、二つの雑録、**a**「巷説・逆臣と公妃」**b**「世間噺・マルゴ公妃」とが収めてある。

aの「逆臣と公妃」を書き綴った動機は、フランソワ一世時代（十六世紀前半期）に関する雑書を濫読しているうちに、「シャルル・ド・ブルボン大元帥 Connétable Charles de Bourbon の叛逆」という事件に度々出会ったところから生れた。しかし、私が読んでいたどの書物も、各々別個の主題を取り扱っていたから、「ブルボン大

元帥叛逆」事件だけを記述したのではなく、この事件には詳しくは触れていなかった。そして、この事件の内容を特に調べなくとも、前後の記述を辿れないことはなかった。しかし、この事件の内容をやや具体的に知っていたら、前後の叙述の理解も更に緻密になったろうとは、いつも思っていたのである。その結果、この「叛逆」事件のことは、解かねばならぬ宿題として、常に脳裡にあった。

ところが、一九六八年、たまたま滞在していたパリで、以前からその存在を知っていた『ブールボン大元帥秘史』N. Baudot de Juilly: Histoire secrète du Connétable de Bourbon, Paris, G. de Luyne, 1696 (Bibliothèque Nationale, 72-42497) の現代翻刻版 (Dr Paul-J. Petit, Jean Vigneau, 1947) を古本屋で発見し購入したのである。この古文獻は、いわゆる史実を脚色した興味本位の物語風のものであり、厳密な意味での史的資料とはならぬかもしれないが、ブールボン大元帥に関する大抵の研究書には、文献として指示されている以上、決して無視はできない貴重な資料の一つと見做してよいと思っている。

私は、この『秘史』をパリの旅舎で、文字通り耽読し、放って置いた宿題を解く気になった。そして、帰国後、手持ちの雑書を読み漁りながら、この古文獻を紹介する形で、「ブールボン大元帥叛逆」事件の概要をまとめてみたのが、aの「巷説・逆臣と公妃」と題する雑録となり、本庄桂輔氏の御厚志により、雑誌『学燈』へ連載（一九六九年―七〇年）していただけることになった。

私だけの興味のために若干調べた「叛逆」事件の内容だけを記述すると、私のノートにしかならず、背景となる時代相や出沒する様々な人物には、あまり触れられなくなるし、詳しく触れれば、一般の読者には煩雑になりすぎるだけだと思った。そこで、先に挙げた『ブールボン大元帥秘史』の読物風な筋を主として辿りながら、その範囲内で、「叛逆」事件と、時代相と、そこに往来する人物とを描いてみることにしたのである。この試みが成功しているかどうか、私には判らぬが、この雑録を綴りながら、フランソワ一世治下の「目鼻立」が、今までよりも、私

にはややはっきり見えてきたことは幸いだと思っている。

『秘史』は、「ブルボン大元帥叛逆」を取り扱ってはいるが、それと併行して、大元帥の悲恋をも「物語」っている。そして、その相手は、フランソワ一世王の姉に当り、文学史でも有名な『エプタメロン』Heptaméron 物語の作者マルグリット・ド・ナヴァール公妃であった。この「悲恋物語」がどの程度史実に即しているものか、これを実証的に究明し尽すことは、私の能力を越えるが、ある程度の根拠があるものとして叙述を進めた。その結果、このマルグリット公妃についても当然言及せねばならなかったが、この有名な閨秀の評伝を書くことを目的とするわけにはゆかなかった。従って、この女性の生涯業績については、全体と釣合いの取れる範囲内でしか、記述しなかった。本雑録は、「マルグリット・ド・ナヴァール公妃伝」ではないからである。このマルグリット公妃の生涯及びその作品について著された研究書は沢山あろうが、左の二著が代表的なものではないかと思っている。

○Pierre Jourda: Marguerite d'Angoulême, Duchesse d'Alençon, Reine de Navarre, H. Champion, 2 vol., 1930.

○Emile Telle: L'Œuvre de Marguerite d'Angoulême, Reine de Navarre et la Querelle des Femmes (1937),

Slathine Reprints, 1969.

尚、『学燈』に連載された時には、題には「巷説」という文字は冠してなかったが、本書に収めるに際し、bの「世間噺・マルゴ公妃」と対応させるために、新たに「巷説」と名附けた。「世間噺」と同義語である。

bの「世間噺・マルゴ公妃」は、一九七〇年度に、佐藤優氏の御好意によって、雑誌『海』に連載していただけたものであるが、これを綴るようになった動機は左の通りである。

フランソワ一世を中興の祖とするヴァロワ王朝には、華美な風潮が見られていたが、十六世紀末に、この王朝が断絶しかける頃には、王朝の爛熟した空気は、濃度の頂点に達していたように思われる。従って、艶名を史上に残した女性たちは、ヴァロワ王朝を通じて沢山見られた。

先に述べたマルグリット・ド・ナヴァール公妃だけは、貞潔な女性であった点で知られて居り、大袈裟に言えば、妖艶な洋蘭の花壇に咲いた一輪の清楚な白百合の花にも譬えられる。そして、艶麗な洋蘭のなかでも、妖美な花として、現代にまで艶名を残しているのが、「マルゴ公妃」と通称されている女性であった。この二人の女性は、その生活・性格の点では対照的であったが、二人とも、ヴァロワ家の姫として生れているし、二人とも、文筆に長じていたし、しかも、二人とも、マルグリット・ド・ヴァロワ或いはマルグリット・ド・ナヴァール公妃と呼ばれているのである。

もともと白百合の花のようなマルグリット・ド・ナヴァール公妃の孫（アンリ四世）の妃が洋蘭の花のようなもう一人のマルグリット・ド・ナヴァール公妃なのであるから、二人の女性は、祖母とその孫の嫁という関係にある。従って、時代のことには多少注意すれば、この二人を混同する筈はないのであるが、あまり酷似した点が多いので、時折間違われることがある。私は、何か機会があったら、洋蘭の花のようなほうのマルグリット・ド・ナヴァール公妃の波瀾に富んだ生涯を通俗的に綴り、白百合の花のようなマルグリット・ド・ナヴァール公妃と対比させてみたいと思っていた。

たまたま昔読んだアレクサンドル・デュマ・ペールの歴史小説『マルゴ公妃』Reine Margot を再読する必要がある、やや誇張された形ではあったが、この女性の情痴生活の一端を思い出し、この女性をそのような生活を送らねばならぬようにしたとも言える十六世紀後半の宗教戦争時代の荒^{すま}まじさに改めて思いを馳せ、無理解と嘲笑とで包まれたらしくも考えられるマルゴ公妃の生涯を一般向に綴ってみたらばと思うようになった。更にまた、権威ある史書（本文中において再述）に、この公妃が nymphomanie（女性の）色情狂の犠牲者と極めつけられているのを読み、何か気の毒にもなった。大局から見れば、確かに、そう極めつけられてもいたし方ないような情痴生活が、マルゴ公妃の生涯の大半を占めていたかもしれぬし、先天的な濁った血の叫びもあったろうが、その環境そ

の時代に追いつめられた結果、異常と思われるような生活をせざるを得なくなったと考えられる節もあり、この公妃の自薦弁護人となり、一種の「情状酌量請願文」を書き綴ることになった。

この時『海』の編輯部の佐藤優氏が、この「請願文」を右誌に連載（一九七〇年）するように取り計って下さり、「世間噺・マルゴ公妃」と題する雑録が生れた。「請願文」として成功しているかどうか、私には判断できないが、同名の二人のマルグリット・ド・ヴァロワ公妃を、少くとも私は絶対に混同することはないと思われるほど明らかに区別できるようになったし、その傍、フランソワ一世の次の時代、アンリ二世、フランソワ二世、シャルル九世、アンリ三世、アンリ四世の時代、即ち十六世紀後半の宗教戦争の時期の大凡を、今までよりも、やや鮮明に眺められる機会を与えられたので、その点だけは大変欣んでいる。

要するに、本書に収められた二つの雑録は、私の興趣の赴くままに、調べやすいものを若干調べた結果それをまとめたものに外ならず、私自身にとって思い出深いノートの一部にはなっても、取り扱われた事項や人物が、日本にはあまり紹介されていないだけに、一般の方々の興味をどれだけ惹き得るか、甚だ疑問である。

本書が成るに際しては、中央公論社『海』編輯部の佐藤優氏の格別なお計いがあったに違いないし、同社出版部の野中正孝氏及び平林敏男氏から、製作に当って色々な御配慮を賜った。心から御礼申し上げねばならない。

最後に、マルゴ公妃に関する貴重な文献を写真版にして、わざわざパリから取り寄せてくださり、単行本にする折に役立たせるようにと望まれた佐藤優氏の御厚情には、特にここに記して、心からの御礼を申しあげねばならない。不敏な私が、旧稿を補正するに当って、佐藤氏の御希望にどれだけお応えできたか判らぬが、十分に参考させていただいたことを申し添えたい。

『学燈』及び『海』へ連載中、本庄桂輔氏と佐藤優氏とが、毎月のように、校正を届けて下さった約二年間の春夏秋冬は、私にとっては実に楽しい老後の思い出になるが、その間両氏におかけしたに違いない御苦勞には忘じ難い

ものがある。

新たに一卷の書にまとめるに際して、旧稿に大幅の加筆補正を施し、記し足りなかったことを加えたから、拙いながら、若干面目を一新し得ているかもしれない。

典拠指示は、銜学的で煩雑の感を与える恐れがあるから、巻末に一括せねばならぬかと思っていたが、出版部の方々は、旧稿通りのほうが面白いとお考えだったので、欣んで、それに従った。

附録「略系譜」と「略年表」と「索引」〔「略年表」「索引」は本「著作集」第十四巻収録〕とは、読者の便を思つて編まれた。多少なりともお役に立てば幸甚である。

一九七一年六月

渡辺 一夫 識

(附記) 二つの雑録とも、積み重ね・繰り返し方式の記述に従っている。煩雑だと思われる方が居られるかもしれないが、もしそういう方が居られたら、**a**「巷説・逆臣と公妃」は、第九項(三六頁)から読み始め、しばらくしてから第一項に戻っていただきたい。**b**「世間噺・マルゴ公妃」のほうは、第三項(三一六頁)或いは第四項(三二〇頁)から読み始め、その次に第一項に還っていただきたい。何しろ我が国では、あまり知られていない人物や事件の話なので、適切な叙述法の選択に苦しんだ結果、先に記したような方式に落ちついたのである。これを諒としていただきたい。

a

巷説・逆臣と公妃

奥のお部屋まで公妃について行って、
公妃が思わず洩らす深い悲しみの告白
を、紙の上に辿らねばならない。

——アナトール・フランス